テント一週一文（ほ）
―― 渡辺ひろ子さん「平和といのちをみつめる会」通信『なずな』287 号の記事より

（承前）

ここにはいない村長さんにはプルサーマルの記事を渡され、目の前にいる女の人には西山進さんの漫画を渡され、どちらにも目を通した。黙っているのも気まずい。どうしようかと思ったが、村長さんに義理を立てるべきだろうと思って、プルサーマルのことを尋ねてみようとした時に、彼女が小さな通信を見せてくれて、言った。

「それはそうと、別の通信もテントには届いているのよ。読んでみる?」

「読みますが、私はあなたと違って頭が悪いから、難しいのはダメですよ」と煙幕を張った。彼女がその小型の通信を渡してくれた。

「『なずな』ですか。易しそうだな。俺にも読めそう」

「福岡県の築上町、知っている?」

「航空自衛隊の築城基地がある所でしょう」

「そうそう。そこで基地反対の住民運動を 30 年続けている渡辺さんが発行しているものよ」

「基地の町で、30 年基地反対運動をしているって言うと、きっと勇ましい方でしょうね、渡辺さんは」

「そんなに勇ましくは見えないわ。普通のおばさんよ」

「30 年前に築城基地で日米共同訓練をする計画が発表された時に…… ここは渡辺さんがいつも強調するところよ、基地の町に暮らす者の一人として、ここで沈黙することは「加担」することになる、「加担者として生きるのはもうやめよう」と強く思って抗議運動を始めたそうよ」

「たった一人で?」

「「平和といのちをみつめる会」を作って、築上町の近くの中津市で住民運動を続けていた松下竜一さんたちと協力して始めたのだけど、30 年以上続けているのも驚異よね」

「松下竜一さんて聞いたことあります」

「松下さんの紹介はまたにするわ。今日は渡辺さんの話。1989 年 4 月 2 日に「築城基地 F 15 配備反対人間の鎖」をしたの。それ以来毎月 2 日を「反基地行動の日」として基地前座り込みを続けているのよ。今年 2017 年 6 月 2 日が 337 回目だって」

「28 年間、毎月? ギネスに載らない?」

「それ位の価値があるわね。「自分たちの抱えている問題と根っこはつながっている」と言って遠くから来てくれる方もいて、毎回 30 人から 40 人が参加しているそうよ!」

「「命をみつめる会」は崇高なモットーを持っていて、それが多くの人を引き付けているわけだ」

「案外そうでもなさそうよ。「住民運動は思想や理論じゃない。義理と人情だ! が私のモットー」と渡辺さんが言っているくらいだから」

「なんだか普通のおばさんですね。通信の名前はなぜ『なずな』なんでしょう」

「私も理由は聞いていないけれど、思うにね、ナズナはぺんぺん草って言われるくらい道端でも荒地でも見かける草なのよ。枯れたように見えても次の年には元気に生えてくるのよ」

「たくましいって感じ?」

「たくましいって感じじゃないのだけど……　生き続けてみせますよって感じね。これが 287 号、ほぼ毎月出しているそうだから 24 年も 25 年も出し続けているわけ」

「1 面の文章は短いですね。おや、規制委員会の田中委員長の発言ですね。委員長は最近変わりましたから、少し前ですね。5 月 2 日号とありますね」

「でもこの文章のテーマは規制委員会じゃないわ。原子力機構の姑息な、って言うか傲慢な方針への反論よ。新聞記事は読まなくても渡辺さんの文章で十分わかるわ」

「分りました。読むからしばらく話しかけないで」

（以下次号）

（文責　栗山次郎）2017 年 6 月 19 日公開

---　---　---　---

※ 以下は、「平和といのちをみつめる会通信」『なずな』287 号より抜粋

田中委員長、言う時は言うんだね！

原発の再稼働の審査の時、いつも「審査基準を満たしている」と再稼働に GO サインを出している原子力規制委員長の田中サン。しかも、GO サインを出した記者会見で彼はいつも、しれ～とした顔で、「審査基準をすべて満たしているということであって、規制委員会として、安全性を保障するということではありません」と言っていた、あの田中サン。

あの田中サンでも、原子力研究開発機構の高速実験炉「常陽」運転再開への説明のあまりのズサンさにあきれたのでしょう。「ナナハン（大型バイク）」を３０キロ以下で運転するから、原付バイクの許可でいいと言っているようなもの」とは、言い得て妙！カッコいい！

完成から 22 年の間に実質 250 日しか稼働させられなかったといわれる、高速増殖炉「もんじゅ」も廃炉が決定的となった今、まだ、原子力高速炉を何が何でも稼働させたい人たち（原子力ムラといわれる）の存在も大きいでしょう。

しかし、それ以上に強い意志で高速増殖炉実験にしがみついているのは「日本も核武装したい」と願い続けている政治勢力です。北朝鮮問題に過剰に反応しているのも、「日本国民に核武装を承認させる（というよりも、国民の中から「日本も核武装すべきだ」という声がわき上がってくる）絶好のチャンス」と考えているからでしょう。